様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

# 科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月　 ３ 日現在

機関番号：１１３０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2018
課題番号：１６Ｋ０２５２５

研究課題名（和文）啓蒙ヨーロッパ文学にみる非ヨーロッパの衝撃――ドイツとイギリスを中心にして

研究課題名（英文）The Impact of the Non-Europeans in Enlightenment Literature

研究代表者
佐藤　研一（Sato, Kenichi）

東北大学・国際文化研究科・教授

研究者番号：８０１７０７４４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：若きレッシング作喜劇『ユダヤ人』（1749作、1754刊)は、社会的・政治的次元のユダヤ人解放を射程に収め、ヨーロッパに自己省察を促して、後進国ドイツから先駆的宣言を発する。また、J.M.R.レンツ作喜劇『新メノーツァ』（1774）は、ポントピダン作書簡体小説『アジアの王子メノーツァ』（1742/43）に倣い、信仰と理性の調和を追求する姿勢をみせ、ルソー的「自然人」として啓蒙ヨーロッパを批判する。さらに、ヘルダー作五篇連作詩「黒人牧歌」(『人間性促進のための書簡』（1793-97）所収)は、植民地主義に批判的なイギリスの文学からも滋養を得て、ヨーロッパの自己批判を示す。以上の点を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義
ドイツ啓蒙期の古典的文学が、ヨーロッパ諸国の文学と相互影響の下で、自国文学を培いながら、当代ヨーロッパに対して自己省察を促すに至った点を、具体的な作品分析を基にして明示した。その点に学術的意義がある。文学研究とは、現状追認しがちな社会的動向のなかで、紋切り型の思考を裏切って、真に開かれた感性や思考を指し示す可能性を持ちうるものである。かかる点に社会的意義が見出されよう。

研究成果の概要（英文）：Having in mind the social and political liberation of Jews, young Lessing in 1749 wrote a comedy called Die Juden (published in 1754), urging the European readers to reflect upon themselves. Thus his literary work turned out to become a pioneering piece born out of backward Germany. And J.M.R. Lenz's comedy, Der neue Menoza (1774), based on Pontopidan's epistolary novel, Menoza (1742/43), criticizes enlightened Europe from the perspective of a 'natural man', advocating - like Rousseau - the pursuit of harmony between religion and reason. Likewise, Herder implied Europe's self-criticism in his five consecutive poems 'Neger-Idyllen' in Briefe zur Befoerderderung der Humanitaet (1793-97), being influenced by British literature critical of European colonialism.

研究分野：ドイツ文学

キーワード：啓蒙　非ヨーロッパ　ユダヤ人　インド人　黒人奴隷　植民地主義　自然宗教

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９、ＣＫ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

（１）科学研究費助成金基盤研究（C）（H24～H26 年度）「十八世紀ヨーロッパの描く異邦人像――ドイツとイギリスの通俗劇を中心にして」では、ドイツの通俗劇について、イギリスの通俗劇との相互影響も見定めつつ、分析を施した。その結果、異邦人は、「高貴な野蛮人」、あるいは「非理性的野蛮人」という紋切り型に描かれ、ヨーロッパ文明の独善的枠組みに囚われた観念的異邦人像であることが明らかとなった。つまり、非ヨーロッパに対する真に開かれた感性や思考が見出しえないのである。これは、通俗劇が観客の嗜好を当て込み、植民地制度であれ国家体制であれ、ヨーロッパの現状追認に徹するからであろう。この点に、通俗劇の文学上の限界が読み取れる。

（２）本研究は、上記研究の反省に立って、考察の視角を転回し、十八世紀ドイツの古典作品に定めるものである。そして、そこに描かれる非ヨーロッパ像の特徴を析出しながら、どれほどヨーロッパ近代の価値を転倒する起爆力を秘めているのか、検討を加えたい、と思う。その際、イギリスの文学・思想との相互関係も視野に入れる点は、先の研究から引き継ぐ。というのも、海外植民地を持たないドイツは、非ヨーロッパ像に関わる情報の多くをイギリスから得たばかりか、逆にドイツ文学がイギリス文学に及ぼした影響も少なくないという事実を、先の研究で確認したからである。こうして、非ヨーロッパ像は、緊密な関係を保つ啓蒙ヨーロッパの中で、相互増幅して形成されてゆくのであるが、従来、かかる比較考定は等閑視されがちであった。

（３）啓蒙期の非ヨーロッパ像受容の考察には、オリエンタリズム研究が欠かせないのは、言を俟たない。当研究によって、異文化受容の仮面が剥ぎ取られ、近代的理性の攻撃的側面が看破された点は、評価する必要がある。しかし、たとえば G.フォルスター(1754-94)が、非ヨーロッパと弁証法的関係に立ってヨーロッパの蛮行を糾弾した点を考えれば、オリエンタリズム研究に潜む、異文化受容をおしなべて暴力的征服に収斂しようとする図式は、公式主義といわざるをえない。本研究課題は、これを批判する立場に立ち、ドイツの古典作品に虚心に耳を傾ければ、非ヨーロッパと遭遇する衝撃によるヨーロッパ自身の創造的変化も聞き取れるのではないか、という仮説から生まれたものである。

２．研究の目的

啓蒙期ドイツ文学は、アフリカ黒人奴隷からインド人やユダヤ人（ヨーロッパ内の非ヨーロッパ人）に至るまで、非ヨーロッパ人のイメージの宝庫である。ドイツは、海外植民地を持たなかったが、とりわけイギリスから黒人奴隷やインド人らに関する多くの情報を得ていた。それでは、当代ドイツは、非ヨーロッパとの遭遇を契機にして、どれほど自己省察の姿勢をみせ、ヨーロッパ自体を相対化することができたのであろうか。この点について、当代ドイツの古典文学を考察の対象に据えて、具体的な検証を加えようとするものである。その際、イギリスの文学・思想とも比較考定する。そして、「啓蒙」の非ヨーロッパに対する暴力的イメージとは対蹠的な側面を示したい、と思う。

３．研究の方法

（１）まず、啓蒙された航海者や思想家や宣教師による非ヨーロッパ認識を見定める。ついで、オーストリア国立図書館等にて、啓蒙期ドイツの非ヨーロッパ像（ユダヤ人・インド人・黒人奴隷像）の描かれる古典作品の幅広い調査をする。そのうえで、当該作品に描かれる非ヨーロッパ像の特徴に考察を加える。その際、できるかぎり当代イギリスの文学動向にも視野に入れるよう努める。

（２）（１）を踏まえたうえで、これらの非ヨーロッパ像が、ヨーロッパにいかなる衝撃を与え、独善的ヨーロッパ文明に対して、いかなる自己省察をもたらすことになるのか、啓蒙期ドイツの古典的作品を精読しながら、論究する。

４．研究成果

（１）ヨーロッパの中の非ヨーロッパという観点に立って、まず、若きレッシング作喜劇『ユダヤ人』(1749 作、1754 刊)の考察に従事した。そのうえで、夏期休暇を利用して、オーストリア国立図書館にて、十八世紀ドイツにおける「ユダヤ人もの」の戯曲、ユダヤ人差別の制度化、並びにキリスト教イデオロギーに関する文献調査を行った。また、ライプツィヒ大学図書館ではレッシングの郷里ザクセン地方における当代ユダヤ人の日常的社会状況について、ライプツィヒ市立歴史図書館では近世から近代に至る反ユダヤ主義的状況について、調査を進めた。これを通して、『ユダヤ人』の置かれた文学的土壌および社会的現実に関する知見を得ることができた。以上を踏まえて、当喜劇の高邁な主人公――従来の滑稽な守銭奴のユダヤ人像とは一線を画す――が生まれる思想的・社会的背景に分析を施しながら、『ユダヤ人』論考をまとめるに至った。

喜劇『ユダヤ人』は、なによりもユダヤ人排斥という難題を前にして、書斎の妄想に耽るどころか、もっぱらプロイセンの現実の猥雑な世相――絞首台の立ち並ぶ荒涼とした風景や雑踏にうごめく市井の人々を活写する筆致は犀利であり、ユダヤ人偏見に対する乾いた批評的笑いも斬新である。しかも最後は、ユダヤ人とドイツ人間の人間的溝が埋まることなく、ユダヤ人嫌いの観客自身（「誠実なキリスト教徒」）が罵倒されて、幕が下りる。すぐれて現代的な挑発的戯曲である。当代ドイツ随一の流行劇作家コッツェブーによる「大衆迎合的」な世界とは対蹠的といえよう。このように醒めた目で人間社会の実相に肉薄し、市井風俗百態を描かんとする『ユダヤ人』は、『賢者ナータン』（1779）の前段階を示す「習作」にとどまるようなものではないことが判明した。

十八世紀ドイツ戯曲に登場するユダヤ人は、もっぱら守銭奴の戯画として嘲笑的に描かれている。『ユダヤ人』を以って、ドイツ戯曲史上、高潔なユダヤ人像の嚆矢とする。もっとも当喜劇刊行以降も、1754 年から 1778 年までユダヤ人登場のドイツ戯曲は 20 作を数えるが、その大半が滑稽な老人や従僕のユダヤ人を描く。たとえば、J.M.R. レンツの喜劇『軍人たち』(1775)も、イディシュ語とおぼしき台詞を話す、臆病な守銭奴の初老ユダヤ人が下卑た笑いを誘い出す。他方、ドイツの小説に目を転じれば、当代随一の人気作家ゲラートの『スウェーデンの伯爵夫人 G***の生涯』（1747/48）には、ポーランドの善良なユダヤ人が登場する。これは、ドイツ文学史上、最初の「高貴なユダヤ人」である。しかし、イギリスのスティール作「インクルとヤリコ」（1711）を基にしたゲラートの物語詩『インクルとヤリコ』（1746）の主人公、南アメリカ先住民娘ヤリコに倣って、このユダヤ人もまた、「感傷主義」に彩られる異国趣味のトポス「高貴な野蛮人」以上のものではない。ユダヤ人を社会的平等の文脈から捉える視点が抜け落ちているといえよう。

イギリスは、クロムウェル登場以降、ユダヤ人差別が収まり始めて、十八世紀には、中欧・東欧からのユダヤ人移住者が激増した。ユダヤ人の土地所有権や職業選択自由を認めたからである。レッシングは、このイギリスおよびオランダにおけるユダヤ人差別の制度的緩和を高く評価した。やや時代は下るが、十八世紀ドイツ文学に通じたスコットは『アイヴァンホー』(1819)の中で、かかる社会・政治状況下に暮らすユダヤ人を描く。そこでは、『ベニスの商人』(1595-97 執筆）の悪鬼の如き守銭奴シャイロックとその娘の原型が、吝嗇漢だが異教徒にも律義な父お

よび高潔な心を抱く娘へと変貌をみせる。しかし『ユダヤ人』は、社会的・政治的次元におけるユダヤ人解放まで射程に収め、啓蒙ヨーロッパの痛切な自己省察がみてとれる。この点を考えに入れると、逆説的だが、一昔前の後進国ドイツの作品の方が、時代を先駆けていたことが分かるのである。

（２）まず、G.フォルスター著『世界周航記』(1777) が、いかに複数座標軸に立ってヨーロッパ文明に対する非ヨーロッパ像を描くのか、見定めた。そのうえで、レンツ作喜劇『新メノーツァあるいはクンバ国王子タンディの物語』(1774) にみるインド人像や当代ドイツの描写に分析を加えた。夏期休暇には、オーストリア国立図書館やライプツィヒ大学図書館にて、十八世紀ドイツにおける「インドもの」調査に臨んだ。その結果、当代イギリスでは、植民地の東西インドを主題とする多くの戯曲や小説が出版される一方、ドイツでは、コッツェブー作喜劇『ロンドンのインド人』(1790) 以外は確認できず、『新メノーツァ』の特異性が浮き彫りとなった。さらに、海外研究協力者フランクフルト大学ヒルメス教授との討議を通して、「デンマーク・ハレ・ミッション」に関する知見を得た。すなわち、デンマーク王フリードリヒ 4 世が、敬虔主義の牙城ハレ大学の協力の下で、1706 年から自国領南インド・トランケバールにて宣教活動を開始したという事実である。そこで、レンツの父親も、ハレで神学を学び、露領リヴォニア先住民のため敬虔主義的実践教育に心血を注いだ点も念頭に置いたうえで、オーストリア国立図書館にて、「デンマーク・ハレ・ミッション」関係の文献調査を行った。その結果、ベルゲン地区監督ポントピダンに行き着いた。この人こそ、正統主義批判の論陣を張った敬虔主義者、書簡体長編小説『メノーツァ。むなしくキリスト教徒を捜し求め、世界を遍歴したアジアの王子』（1742/43）の著者その人である。『新メノーツァ』は、これに拠って執筆されたものにほかならない。しかし、通説では、当小説を正統主義の「護教書」と断じるのみならず、書簡体小説『ペルシア人の手紙』(1721) のモチーフ以外、『新メノーツァ』に対するいかなる影響も認めようとはしない。そこで、まず『メノーツァ』を精読し、ついで、「デンマーク・ハレ・ミッション」を軸に据えて、『メノーツァ』と『新メノーツァ』を比較考定することにした。前者のインド人王子は、心情溢れる自然宗教に培われた少年時代を送り、トランケバールにてドイツ人宣教師との対話を経て回心を体験し、内面を尊ぶ敬虔主義者となる。そのうえで、「真のキリスト教徒」を探しにヨーロッパを遍歴し、啓蒙された人々の宗教的形式主義や楽観的合理主義や宗教的熱狂を、ルソー的「自然人」さながら批判する。後者の王子は、「真の人間」を捜してヨーロッパを遍歴するが、前者に倣うように、信仰と理性の調和を追求する内面的姿勢をみせて、同じくルソー的「自然人」として啓蒙ヨーロッパを辛辣に批判する。すなわち、両者のインド人王子像の根底には、ひっきょう、ルソー的な心情豊かな自然宗教に通じる面が潜むことが判明した。もっとも当代ヨーロッパにおける本格的なインド受容は、十八世紀末の W.ジョーンズによる画期的なサンスクリット文学古典の英訳『シャクンタラー』を待たねばならない。周知の通り、1791 年、G.フォルスターがこの英語版を独訳した結果、ドイツ・ロマン派詩人らは、インド像に魅惑され、啓蒙ヨーロッパを功利的、世俗的、進歩的として弾劾するに至る。

（３）まず、ドイツ啓蒙を牽引するヘルダー著『人類歴史哲学考』(1784-91) と『人間性促進のための書簡』(1793-97) にみられる非ヨーロッパ像を読み解いた。そして、ヘルダーには、いわゆる「ヨーロッパ中心主義」や「反ヨーロッパ中心主義」という枠組みには、到底収束し得ない複眼的身構えがみられる点を見極めた。そのうえで、ヘルダー作五篇連作詩「黒人牧歌」(『人間性促進のための書簡』所収)を精読して分析を施した。また、夏期休暇を利用して、ラ

イプツィヒ大学図書館では、啓蒙期ドイツの「黒人奴隷もの」関連の文献調査に従事した。そのうえ、ゲラートとヘルダーに関する意見交換をゲラート文学館館長とする機会もあり、ヘルダーの啓蒙的姿勢がゲラートらにより培われた土壌にも根差している点について、知見を深めた。さらに、オーストリア国立図書館では、「黒人牧歌」成立に深く関わると考えられる旅行記や宣教師報告書等を調査した。それらは、クレーヴクール作『アメリカ農夫の書簡』(1789)、ヘルンフート兄弟団伝道者オルデンドルプの実体験に基づく『カリブ海諸島史』(1777)、あるいはステッドマン作『スリナム黒人反乱鎮圧記』(1796)の初版原書(英語版)(同時に、1797年初版ドイツ語翻訳書)である。なかでも稀覯本オルデンドルプとステッドマンによる黒人奴隷に対する白人の過酷な罰に関する記述を読めたことは、「黒人牧歌」を考察するための重要な基礎固めとなった。秋以降は、「黒人牧歌」が直接依拠したと考えられるコルプ編『黒人奴隷の風習や運命』(1789)を精読し、「黒人牧歌」と比較考定して、黒人奴隷および植民地制度に対するヘルダーの姿勢の実相を読み解くことに努めた。その結果、以下の諸点が明らかとなった。①原作に色濃く漂う、大農場園主に対する黒人奴隷の怒濤の攻撃という政治的性格が、「黒人牧歌」では決定的に薄められていること。②それに伴い、高邁な黒人像においては、イエス像に通底する倫理的優位性が強調されていること。③奴隷貿易の非人間的状況が鮮やかに浮き彫りにされること。④イギリスの A.ベイン作『オルーノコ』(1688)は、戯曲化(1695)を契機に十八世紀に汎欧的人気を博し、主人公の黒人王子は、当代「高貴なる野蛮人」の黒人像の原型とみなされる。「黒人牧歌」は、通俗的色彩が薄れ、高い文学性を有すとはいいながら、この系譜上にあるとみなせること。

さて、ヘルダーは、コルプ編物語「序」をはじめとするドイツ系宣教師報告書やイギリス系旅行記等を通して、アフリカにおける黒人の「動物的」イメージを培ったものと考えられる。そのような黒人像は、『人類歴史哲学考』からも読みとることができる。それと対蹠的に、コルフ編の諸々の物語を通して、イギリス植民地カリブ海諸島や北米における高潔な黒人奴隷、すなわち、ルソー的「自然人」としての黒人奴隷のイメージもまた抱くに至った。「黒人牧歌」所収の『人間性促進のための書簡』は、くりかえし黒人に対する共感を伝え、ヨーロッパ植民地主義の野蛮さを弾劾する。ここには、啓蒙された自己批判的ヨーロッパの姿勢が、明確にみてとれるはずである。しかし、このせめぎ合う両黒人イメージは相矛盾している。ヘルダーは、数多くの報告書等を渉猟したとはいえ、西インドや北米の黒人奴隷の惨状を見たわけでもなく、調査した限り、黒人との個人的交際もなかった。つまり、正負両面の黒人イメージは、あくまでも書斎人として把握したものである。されば、黒人像を一義的に捉えられず、その結果、「人間」としての黒人の描写は叶わなかった。かかる両義的な姿勢に、非ヨーロッパを一面的に固定化しようとしない意図的な視点をみてとるのは無理があろう。現代のわれわれからみれば、ドイツの書斎人としての限界を認めざるを得まい。

また、イギリスのチャタートン作三篇「アフリカ牧歌」(1770 作)は、奴隷商人への復讐の一念を、ラシュトン作『西インド諸島牧歌』(1787)は、黒人奴隷の過酷な生活や無慈悲な農園主、奴隷反乱を赤裸々に活写する。前者は、夭折の天才詩人として名高い。他方、後者は忘れられた詩人・奴隷解放論者である。奴隷貿易拠点港リバプール出身で、奴隷船の貧しい一乗組員としてジャマイカの滞在経験がある。ヘルダーがこの両英国詩人を読んだのか、今までの調査の限りは不明である。しかし、海外植民地を持たず、奴隷貿易に直接関与しないドイツに暮らす作家・思想家として、「黒人牧歌」執筆の際、これらイギリスの諸々の植民地主義批判を盛り込んだ文学的土壌から滋養を得たと考えても大過あるまい。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計４件）

① 佐藤　研一、「劇場は古代ローマ闘技場（アレーナ）にあらず」――レッシング作『ラオコーン』にみる古代ギリシャ――、東北ドイツ文学研究、査読無、第 60 号（2019 年）、未定

② 藤田　緑、「余は如何にして劣等人種となりし乎」、比較文學研究、第 102 號（2017 年）、査読有、18-31 頁。

③ 佐藤　研一、若きレッシングの喜劇『ユダヤ人』――近代ドイツ戯曲の一里塚――、国際文化研究科論集、査読有、第 24 号（2016 年）、31-42 頁。

④ 藤田　緑、「高貴な野蛮人」からの訣別――18 世紀コミックオペラの黒人奴隷――、国際文化研究科論集、査読有、第 24 号（2016 年）、1-13 頁。

〔学会発表〕（計８件）

① 佐藤　研一、レッシングのみる古代ギリシャ――『ラオコーン』を中心にして、第 61 回東北ドイツ文学会、2018 年 10 月 20 日

② 藤田　緑、ビッカースタッフの笑劇『スルタン』にみるトルコ表象、第 76 回「中東」表象研究会、2018 年 11 月 14 日

③ 佐藤　研一、ふたりのメノーツァ――ポントピダン作小説『アジアの王子メノーツァ』と J.M.R.レンツ作喜劇『新メノーツァ』、第 73 回「中東」表象研究会、2018 年 5 月 9 日

④ 佐藤　研一、レッシング作『ラオコーン』に描かれる古代ギリシャ、第 92 回十八世紀ドイツ文学研究会、2017 年 12 月 9 日

⑤ 藤田　緑、『江漢西遊日記』にみる異人表象――黒坊・紅毛人・唐人、第 69 回「中東」表象研究会、2017 年 4 月 12 日

⑥ 佐藤　研一、劇作家レッシングと古典古代、第 66 回「中東」表象研究会、2017 年 4 月 12 日

⑦ 佐藤　研一、悲劇『エミーリア・ガロッティ』にみる宮廷言葉と市井言葉の交差、第 89 回十八世紀ドイツ文学研究会、2016 年 12 月 17 日

⑧ 藤田　緑、戯ける黒人――１８世紀日英文学作品にみる異人表象（１）第 62 回「中東」表象研究会、2016 年 10 月 16 日

６．研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：藤田　緑

ローマ字氏名：(FUJITA, MIDORI)

所属研究機関名：東北大学

部局名：大学院国際文化研究科

職名：名誉教授

研究者番号（8 桁）：10219024

(2)研究協力者

研究協力者氏名：ヒルメス　カローラ

ローマ字氏名：Hilmes　Carola